

〈資料紹介〉

狩野文庫マイクロコレクションについて

教授 木場 明 志
(日本近世近代宗教史)

このほど、本学図書館に東北大学附属図書館所蔵『狩野文庫』史料のマイクロフィルム版を部分購入することができた。『狩野文庫』は10万8千冊に及ぶ一大コレクションであるがゆえに、現在まで進んでいる5万5千冊分のマイクロフィルム化事業を賞賛する一方、必要に駆られて購入する側でもかなりの決心を要した。このたびは、文部科学省の私立大学研究設備等補助金制度を利用し、神道・儒学の領域に限って購入したが、残る分野に関しても垂涎の想いが続いている。

さて、『狩野文庫』は秋田大館出身の教育家狩野亨吉(1865～1942)による近世書物のコレクションである。亨吉は1898年に第一高等学校校長に就き、1906年には京都帝国大学文科大学初代学長となったが、集書家としても著名で、友人である東北大学初代総長沢柳政太郎(1865～1927)の要請に応え、貴重書を中心とする10万冊余を4次に分けて東北帝国大学に有償・無償で譲った。また、安藤昌益の著書『自然真営道』を世に紹介した人として高く評価される。他の蔵書は、東京大学駒場図書館に『狩野亨吉博士遺蔵文書』として現存する。

ここでは、今回本学が購入した『狩野文庫』中の「明時館叢書」について若干触れておこうと思う。「明時館叢書」は、江戸幕府にあって、天文観測と暦本版行を司る部署の長官(天文方)にあった、渋川景佑(1787～1856)の編になる暦関係文献群である。景佑所蔵の暦関係文献とみられ、その書目については国立国会図書館、および近世大坂の天文学者間重富家の蔵書『羽間文庫』に「暦書目録」がある(大崎正次編『天文方関係史料』

私家版、1981年)。しかし、書目のみに留まらない実際の文献内容は、「明時館叢書」によって眼にすることができる。

近時、私も永年関わる近世陰陽道研究が、漸くに近世史の重要分野として認知されてきた。林淳『近世陰陽道の研究』(吉川弘文館、2005年)の刊行が与かって大きいのが、それは、同『天文方と陰陽道』(山川出版社 日本史リブレット、2006年)とも相俟って、科学史の一分野に過ぎなかった天文暦学史をも巻き込み、壮大な視野での幕藩体制史再点検の提唱に繋がっている。後者では、仙台藩の天文暦学者の再評価を強く説いている。私はかつてより「明時館叢書」を利用しており、史料を論文に使っていてもいる。特に、平安時代から700年以上も依用していた暦法(宣明暦)を、より科学的な暦法(貞享暦)に改めた渋川春海(1639～1715)の事績、およびその後の幕府天文方の動向を知るには一級史料である。また、朝廷方にあって陰陽道全般の利権に固執する陰陽家土御門家(安倍晴明の末裔)と幕府との交渉・軋轢に関する史料にも事欠かない。渋川景佑はまた寛政改暦の担当者でもあった。

利用価値の一例を示したが、『狩野文庫』史料は近世陰陽道研究に新たな視点を与える好史料であるだけでなく、本学が進める近世の宗教・思想の研究に多大に資することは疑いがない。コレクションの中から神道・儒学に関わる部分を優先購入したのは、近世の陰陽道が儒家神道として存在していたことによったが、より広い利用が見込まれることは謂うまでも無い。大学全体で今後とも更なる活用を続けていきたい。